

## PROCESS GENERATES STRUCTURES Structures Alone Don't Generate Process

プロセスは構造を生成する –しかし構造単独ではプロセスを生成しない–

E.T.Gendlin, Ph.D

E.T.ジェンドリン Ph.D.

訳：大迫久美恵・末武康弘・得丸智子・松下弓月・村里忠之・諸富祥彦  
(五十音順)

### 要 約

この論文で私は、これまで私が哲学分野で書いたすべての論考をごく簡単に議論したい。プロセスは、プロセスがいかにして構造を生み出すのかという点について、4つの節で論じたい。

I. プロセスは構造をつくり、そしてそれを変化させたり、拡張したりしうる。一つのプロセスは常に多くの暗黙の可能性を有している。その可能性は構造ではない。暗黙の何かがどのような仕方で存在しているのかという、まさにその点が議論の的となる。プロセスが次の事象をインプライし、つくるのだ。

II. 人間が事物をつくるやり方は、最初に安定した分離可能な部分をつくり、そして次にそれらを一緒にしてアレンジするというやり方である。そのため、私たちは自然の事物についてもそれらがあたかも安定した部分から成り立っているかのように、簡単に考えてしまいがちである。しかしながら、ほとんどの生けるものは、そのような仕方でつくられてはいない。それらは絶えず自らの部分を再生成している。これが何かをつくる異なった2つの仕方である。バラバラの部分とともに、通常前提とされているようなたぐいの“空間”や“時間”といったものが生じるのである。そうしたたぐいの考えが暗黙のプロセスを見えなくし、その結果私たちの経験のほとんどが不可能なものに思われるようになる。

III. 暗黙であるものが、どのように明示的な構造が提供しうるものよりも、多くの諸関係と多くの正確さを持っているかを論じたい。暗黙なるものは、さらなる可能性をインプライしているような正確かつ未完了な無数の可能性を相互に関連させる。それらの可能性は、次の事象のあるシークエンスをインプライしている。その事象のあるシークエンスは生成的な正確さを“解明(展開)開で明らかにしている。実際に生起するものが、そのインプライングをエクスプリケートする。それぞれのエクスプリケーションは新鮮なさらなるインプライングをもたらす。

IV. 科学の諸発見は、私たち自身の体験過程を否定しているように思われるし、また体験過程は科学の発見を否定しているように思われる。科学と体験過程はこのように全く違って見えるけれども、私たちは論理的な正確さと体験的な正確さの双方によって思考することができる。なぜならそれらは元々関係性を持っているものだからである。

### I. プロセスがその構造を生成し、さらに再生成する

脳の一部が損傷を受けたとき、脳の機能が他の部分では通常はその機能を司ってはいないような他の部分によって取って代わられることがしばしばある。私たちがこうした変化

が可能であることを知りうるのは、それが起きていることを発見するからであるが、科学はさらに、どのようにしてそれが可能であることを説明しうる新しい概念を付け加えることを必要とする。

特別なケースにおいてのみならず、多くの通常の仕方においてもまた、私たちがどのように機能しているかが構造をつくり出し、変化させるのである。通常の思考をすることが脳細胞とその新たな連結を生成する。コンスタントなストレスが肉体的な変化をもたらさう。身体的な構造が“心”から切り離されて存在していると考えるときには、心身的な影響は厄介な問題となる。しかしながら、心と体は二つの別のものではなく、一つのプロセスであり、そのプロセスが構造を生成し、また再生成するのである。

もし患者が、自分が薬を飲んでいてと思うだけでも 40%は改善する。実際に薬を飲むならば、60%は改善する。この“プラシーボ”という考えは、“身体”から“心”を切り離して別のものにしてしまう。全く有機的なものではないかのようだ。私たちは、身体そのものが内在的に生起させる治癒のプロセスを認識し、研究することができる。私たちは、そのプロセスについて研究する必要がある。というのも全ての医学的な介入は、最終的にはこの治癒のプロセスによるものだからである。

これらの一見困難な問題が生じるのは、現在浸透している諸概念においては、そうしたプロセスは思考され得ないからである。私はここで、私たちがまた違ったたぐいの概念を付け加えることができるということを示したい。私たちが一つの構造だけを考慮するときには、その構造が破壊されたときに、その機能が持続できることが不可能に思われてしまう。構造が失われるとまた、普通はその機能も失われると考えるのではないか。この問題は、私たちが全ての構造が継続的に生成されつつあるものとみなせば説明（そして研究）可能である。構造は常に生命体のずっと広大な暗黙的なプロセスによって生成されつつあるのである。決して既に構造化されたものだけがあるのではない。常に暗黙的な多くのさらなる可能性を伴ったプロセスもまたあるのである。

ここで“インプリシット”という考えについて話したい。

よくある人間のプロセスから具体例を一つ挙げよう。いつもどんな風に話すか少し考えてみてほしい。何かを言おうとするとき、それを 2、3 の文で言うだろう。しかしもし他の人がさらに尋ねたり、一人でさらに考えたりするなら“それ”はどんどん拡張していくことができる。そのときそれ（あなたが言おうとしていたこと）が非常に多くの素材や部分を持っていたということが明らかになる。生じることの中には、あなたを驚かせるものもある。それらは全て既にあなたの言おうとするレディネスの中に存在していたのだろうか。おそらくそうではないが、何らかの仕方でそこにあったのだ。それがそこにあったその未完了なあり方を私は“インプリシット”と呼ぶ。

あなたが言わんとしていることの中に、全てのそのようなものがどのような仕方で存在していたのかを見てみよう。これら多くの素材と発展は分離した構造ではなかった。そこに隠された構造が待ちながらあったのではない。構造としてそれらは新しい。それらはあなたが話し続けたときに発展した。しかしそれらはただ新しいのではない。それらはただ新しいだけでもなく、既に構造化されたものでもない。この“～でもなく”は新しい概念を導く。“インプリシット”なものは分離されていない多様な可能性からなっており、あなたが実際に話す一つの特的な次の文が成立するように全てが機能するのである。

言葉を生じさせるためにあなたは何をしているのだろうか。あなたは自分が言わんとしていたことを感じ続け、そして口を開く。そして言葉が出てくる。あなたが言わんとしていたことを言うことのための言葉を既に持っていたわけではない。あなたはそれを身体的な仕方で持っていたのである。言わんとするということはあるインプライングである。言わんとすることがその次に生じてくることをインプライしている。あなたがその表現でよしとするならば、それは実際の文になるだろう。語るということは一種の“明在化”である。実際のできごとは暗黙のものを明在化しうる。

そうなのだ、継続するつながり全体は、最初からインプライされているのである。しか

インプライングは完了された構造よりもずっと多くのものである。それはそれ自身を推進し、その際ある次の構造化された事象が生じ得るようになる。そのような仕方、また別のできごとが次々と可能になるのである。暗黙であるものは、実際に起こることが可能になる中でそれ自らを明在化する。

あなたが言おうとしていることの軌跡を見失ったときには、それに気づかざるを得ない。というのもそのときには、もはやそれから語ったり思考したりすることはできないからである。しかし時々もう一つの困難が生じる。その感じ(that)から話そうとしても言う内容が違ってしまふのである。それはそれを開かないし推進しない。このようにインプリシットは非常に正確であり、頑なまでに要請的である。そこでインプライされていることに触れないままに、触れていないということをずっと知りつつ、何年もの間語ったり思考したりすることもできる。もしそこにただ完了された構造だけしか存在しないのであれば、これはおかしいことになるのである。つまりあなたが今考えていることだけを持つということになるだろうから。それがインプライされているものではない、ということを知るのであるだろうか。それが、今インプライされていることを知らないのに。しかし私たちは、自分が語り得ることにしばしば頑固なまでにずっと不快感を持つということを知っている。私たちはインプライングが満たされないということを直接的に知りうるのである。

語るということは一つの例にすぎない。他の多くのことがあなたに生じ得る。インプリシットは全く誰にでもなじみのものである。“インプリシット”という言葉は今日広く用いられているが、通常の過程ではそれは逆説、つまり“そこにあったがなかった”ということになるように思われる。もし“あった”そして“ある”あるいは“存在する”という言葉によって意味するものを拡張するのであれば、この逆説は開くのである。存在するものは構造であるだけではなく、構造あるいは無であるだけではない。“ある”ものは常にまた、一つのインプライングでもあるのだ。しかしもちろん私たちが存在という概念を変更することは小さな変化ではない。“インプリシット”と“明在化”という概念は、たいていの事象の理解を明瞭化することができる。そして私たちがしたり言ったりすること全ては、構造としてそこにあること以上のものであるインプライングを明在化するのである。

全く馴染みのあるものであるけれども、大変に謎でもあるようなことがあり得る。“インプリシット”という言葉で、この馴染みがあるけれども、謎であるような、私たちが自分の言いたいことを言う仕方を言及するために使うことにしよう。それを言うときに、それは拡張する。もしあなたが、“インプリシット”という言葉で何かを言わんとする普通のレディネスを直接に指し示すようにするのであれば、そのときあなたは進行するにつれて、私が提示する概念を受け入れるか否かを定めることができる。もしあなたがこの言葉でそれを言わせるのであれば、そのときあなたは私が語っているよりもさらに、そしてよりよく何かについて考え得ることもまたできているのである。

私は私たちが経験している“それ”を指し示すために言葉を持ち得るのだということを強調したい。たとえその言葉がある概念をもたらすのだとしても、その言葉は“それ”の馴染みあるあり方を指し示すこともできるのだ。これらは言語の二つの異なった用法である。私たちはその両者のよいところを保持し得るのである。

インプリシットという概念は単に個人のことだけではない。；インプリシットという概念はまた歴史を含むあらゆるできごとにも当てはまるのである。社会的なできごととはそれ以前に起こった社会的なできごとを明在化する。後のできごとは以前のできごとがインプライしていた様々な性質を分離し、強調する。そのできごとが何で“あった”のか、そのいくつを見るのは今だけである。さらなるできごとは、以前のできごとを明在化する。

実際のできごとは、新しいインプライングをもたらす。けれどもこれらは、既に起こったこととある仕方で連続している。どの“部分”が新しいのか。私たちは新しい部分を古い部分から分けることはできない。なぜならばエクスプレケーションにおいてその部分（ユニット、構造）はただ新しいのでもなく、ただ古いのでもないからである。そしてそれぞ

れの部分がさらなる新しいインプライングをもたらすのだ。私はこの種の継続を“キャリ  
ングフォワード”と呼ぶ。

起きていることは全て構造化されており、かつ構造化されていない極めて多くのさらなるできごとをインプライする。

私たちがエクスプリシットに形成されているものだけができごとではないということ  
を認識するならば、私たちが抱える困難な状況はもっと希望のあるものになる。むしろ私  
たちができごとをとっても多くのさらなる可能性を持つものとして扱うならば、そして私  
たちがその可能性が実際のできごとが新しいインプライングをもたらすときにゆっくりと  
ではあるが現れ得るということを理解するならば、今新しい何かが始まるいくつかのステップ  
を見出すだろう。

実際に生じることは、エクスプリケイティングのプロセスである。無数のインプリシ  
ットな可能性は次なるできごとの連続をインプライし、その可能性はその連続を変化させ得  
る次なる変化をインプライする。

## II. ものをつくる 2 つの仕方

人間は“ホモファードル（工作人）”である。つまり私たちはものをつくる。私たちがも  
のをつくる一つのやり方は、まず部分に分けるということである。私たちは分離された構  
造としてそれぞれの部分をつくる。ある工場はその部分をつくることしかしていない。そ  
の後で私たちは部分を集めて最終的なものをつくる。全てのは自ずと分離された部分  
から構成されていると考える傾向がある。レンガやボルトやマイクロチップのように。私  
たちは（私たちを含む）生きているものもまた分離された部分から構成されていると考  
える。足、指、皮膚、骨。私たちは動物に関しても分離された“組織”という点で考  
える。消化器官や生殖器官のように。私たちは神経と細胞を分離する。私たちは特定のタンパク質  
を生成する“化学的な工場”をここに見出す。

しかし生きているものはそのようにものをつくってはいない。生きているものは生命体  
全体のプロセスから切り離されたものとして、皮膚だけをつくったりタンパク質だけを別  
につくったりはしない。タンパク質をつくる“その”工場は、タンパク質だけをまずつく  
ったりはしない。生きているものは自らと“その”部分を常に新たに再生する。その工場は常  
に新たに再生される。このようにこれらのタンパク質は多くのインプリシットに変化す  
る特徴を持ち続ける。それはタンパク質が分離されて持っているよりもはるかに多くのも  
のである。それは私たちの現在の諸概念を表しているような分割可能な部分と粒子におい  
て仮定されているよりも、ずっと正確な仕方でインプライされており、生起する。

私たちは機械の部分を最初につくる。私たちがその部分を組み合わせるまではその機  
械を動かさない。しかし生きているものは、部分をつくるときには既に作動している。例  
えば、胎芽の胚におけるように。そして生きているものは常にその部分を再生している。機  
械をつくるのとは異なる種類の製作は私たちにとって理解するのが困難である。しかしそ  
れは分離可能な部分をつくり、組み合わせることよりもずっと“自然な”ものである。

生きているものは、数百万年もの間“同一の”形態とパターンを反復しているように見え  
る。しかしどの“同じもの”も新しく異なるものである。私たちが“同一の”器官と細胞を持  
っているように見える。しかし意思は常に私たちに“体はどれも違う”と言う。ある薬物にこ  
れら“同じ”であると仮定された部分が、どのように反応するかが全く予測不可能である。  
意思は生きている体とその生きている“部分”を扱わなければならないが、現在の過程に従  
うと、私たちが生命を持たない完全に構造化された構造からつくられている。“身体”は私  
たちが死ぬときにそこから離れるものであるということも同じ誤りである。いや、それは  
死んだ身体であろう。ここにあるそれは生きている身体である。それはインプライングと  
エクスプリケイティングに携わっていて、新たなインプライングをもたらす。

生きている身体は進行中の身体 - 環境相互作用からなっている。最初にバラバラの構造

があって、その後で環境と相互作用するのではない。

諸構造についての概念は他に取って代わることができないほど有益である。ある部分が何をつくり出すかということについて知ることは、私たちが介入してそれを改良したり修復したりすることを可能にする。科学について見下すことは単に馬鹿げたことである（コンピュータで科学を見下すようなことを書くことも馬鹿げたことではないか？）。しばらくの間“同じもの”として留まっているどんな構造化されたパターンも、正確かつ計り知れない程貴重なものである。しかし医学的に分類される病は体の中では分離された実態ではない。この種の概念は何かインプリシットにあるあり方を含むことができない。あるインプリシットに複雑なプロセスは、そのパターンのみならず、はるかに多くのものを生み出す。

私たちは二つの種類の制作を対比させている。この一方の人間的なやり方についてもっとじっくりと検討しよう。私たちはどのようにしてバラバラな部分によってものをつくるのか。私たちはパターンによってそれをつくる。私たちはそれ自身からその事物自体が持たないパターンをあてがう。私たちは木に対してパターンを移入することで家具をつくる。木ははるかにずっと複雑な組織を持っているが、しかし木はその家具のパターンを持たない。私たちは木の諸特徴からも、そしてまた分子や粒子からも科学的なパターンをつくり出す。私たちは自らの意図から、パターンを事物へと移し入れる。私たちのパターンは、私たちがそのパターンを適用し、移し入れたりする場合にも同じままに留まる。私たちはそのパターンに影響しない空間において活動しているように思われる（思われるだけだが）。それ故にその空間は、その空間の中にある対象を除いて明らかに空虚であるように思われる。

ある工場において制作された“同じもの”は、これはここにあって、あれはあそこにあるという限りにおいてのみ識別される。それらの位置関係が、これとあれを区別する全てである。ここにあるこの粒子は、以前はあそこにあつたそれである。位置関係は“ここ”を“あそこ”に関係させる観察者に依存している。位置はお互いに関係づけはしない。知覚者の“ここ”から“そこ”へが、それらを必然的に関係させるのだ。

私たちが用いるパターンは、事物そのもののパターンではないのである。パターンは、私たち人間のパターンなのだ。それは私たち人間のパターンであり、しかし事物との相互作用によりつくられるものである。私たちがパターンをつくり出すのは、実験室において実験器具を用いて事物とかかわり、同じ結果を常に（ほとんど常に）生み出す操作を見出すまであらゆる類いの運動を試すことによってである。その結果が真にその事物の可能性である。しかしそのことを言い得るのは、それが私たちに応答する限りにおいてである（Gendlin, 1997b を参照）。事物は古代においては、こうした応答を持っていたかもしれないが、ただし私たちの道具やパターンがそれに適用された限りにおいてである。私たちのパターンによれば、事物はそうでなければそれらが示した以上のものであろうものを示すのである。しかしそれは私たちの現在のパターンに適合するもののみを示すのである。私たちが事物のパターンと見なしているものは、実は私たちのパターンに適用された事物のパターンなのである。

現在の科学的なパターンは多様なパターンであるけれども、それらは大抵は構造のみを仮定しているのであって、インプリシットなものは何も仮定していないのである。しかし私たちが経験するもののいくつかだけが、そのパターンにおいて存在しうるのである（注2）。現在の科学的な概念に従うと、日々の私たちのありようのほとんどがとらえられないのである。現代物理学において生じていることの大半は、なおまだ至るところにある古いモデルに従うのならば同様に不可能である。

大抵の現在の諸概念が仮定しているのは、“ある”とか“存在する”ということが“空虚な”こちら-そちら空間（hire-there space）を満たしていることを意味しているということである。この種の空間は、私たちが分離可能な事物を制作することによって生まれるものである。分離可能性こそがまさにこの空間なのである（IS）。つまりどの事物もあらゆる他の

事物の外側にあるのである。全ての部分あるいは粒子は、それ自体と同一のままに留まると仮定されているし、他の部分や粒子の外側にあると仮定されている。しかし空間は、私たちがそこにあるものにパターンを重ね合わせることによってそうするまでは、空虚でもなければ、単なる位置関係でもない。

ここで私は、時空についての位置関係図式がどのように実際の差異を覆い隠しているのかを論じたい。位置関係的な種類の時空間は、位置関係的な類いの時空間をつくり出すまで削り取られなければならないような、ものによって満たされた時空間が存在する。

人間の（および動物の）行為可能性というのは、バラバラにリストされ、数えられるものではあり得ない。人間や動物の行為可能性というのは、もっとずっと多くのものである。人間や動物の行為可能性はまた、もっとずっと複雑に組織化されている。というのは、どの一つの行為であっても、他の様々な可能性がいかに生じ得るかということを変化させるからである。一つの行為というのは、他の様々な可能性における変化の“クラスター”であり、それは新しいそれらを創造する。それらは充満した一大“空間”を形成する。どの一つの行為もこの全“クラスター”を推進するのである。

クラスターは過去のできごとを保持する。しかしながらまた、それらを開き、拡張する。というのも、そのクラスターはさらにインプライしているからである。クラスターは同一のユニットの論理に還元することはできないある種の連続性を持っている。しかしクラスターは全く未規定なものではない。そうではなくて、論理的な推論よりもずっと正確なものである。それよりも前にあったターム群の内部に留まるのではなくて、新しく作り出されるタームをもってしなければ不可能な論理的な意味感覚の作り方がある。この“機能的”な類いの論理は、長年にわたって思想家たちを悩ませてきた。というのも、それはしばしば生じてきたけれども理解されることはなかったからである。論理は前もって固定され、同一のまま保持された一群のタームを必要とすると考えられていた。

論理はそれが用いるユニットを決定することはできない。そして言葉が何を意味しているかは、固定されたユニット群の内部で決定され得ない。言葉がまず何かを言う。そしてそれらの言葉がどのように用いられていたかを検討するのである。

インプライング・生起・インプライングから生じる新しい用語は“生命体的意味”を持つことができる。というのも、語りは小さなさらなる生、すなわち小さな身体—環境相互作用であるのだから。生命体的意味形成から私たちは、生じたことを論理的に展開することができる、そのような新しい単位を生み出すことができるのである。論理的に生じうることは、実際の身体・環境の相互作用において生じるであろうことに本来的に関連している。

私たちの中の生命体的プロセスは、たとえそれが位置を示す“点”の空虚な体系によって覆い隠されている場合によっても継続されるのである。一群の行為可能性は、実際には減じられず、ただ覆い隠されるだけである。私たちはインプリシットから考えることはできないように思われる。なぜならば、私たちはそれを私たちが持っている用語に合わせようとするからである。私たちはそれを、“ここからそこへ”という空間において、構造化された対象として考えようとするのである。

どのような理論あるいは哲学（もちろんこの哲学も含めて）もインプリシットを明在化しないだろう。しかし展開として私たちはインプリシットから語や行為が生じ、そしてそれを推進するようにさせることができる。私たちはその様々な性格を、正確なストランドとして次々と展開することができる。

位置空間と構造のみを守るべく、私たちがこれまでどれだけこれらの部分や粒子でもって、多くを達成することができたかを見よう。現在私たちが持っている広大な技術は、部分的にはこの種の内容のお陰なのである。他方、物理学が既にその空間とその“同じ”部分を拒否せざるを得なかったことに注目しよう。この部分は同じままに留まらないのである。現代の物理学は操作と数学のみを用いる。そして何という数学であろうか！操作にのみ結びつけられた数学。物理学はいかなる説明的な概念を用いることもなく、この旧

モデルを超えて進むのである。“量子場”等式が発達し、操作の結果を予測するまでは量子場は不確定である。神経学を含めた他のほとんどの科学は、今なお旧モデルを前提とした諸概念を用いているのである。

同様の空虚化が時間に対しても生じる。時間というものが単なる時間の点の連続に還元されてしまうのである。それぞれの瞬間は、他の全ての瞬間と同じであるように思える。それはただ、ある時間の直線における位置の違いとしてだけ識別されるだけである。けれども過去というのは、それより以前の位置における生起なのではない。莫大な数の過去の要因を考えよう。過去の要因というのは現在生起している訳ではないが、現在生起しているものを形づくってはいるのである。なぜなら過去の諸要素がもし生起していなかったのであれば、現在生起しているものは違うように生起するだろうからである。過去の諸要素というのは現在機能しているのであるが、それらは生起している構造としてではなく、暗々裏に機能しているのである。過去の諸影響というのは、正確ではないかもしれないが、その正確さをたどることができる。私たちは多くの諸要素と因果の連鎖を同定することができる。けれどもそれらの要素は、“諸要素”のリストのようにバラバラに影響しているのではない。それらの暗黙の機能というのは、この一つの生起だけを生み出すのに正確である。そしてその生起を私たちはさらに新たな、そしてより多くの莫大なタームを用いて説明することができるのである。

単なる位置的な時間は、各瞬間が推進されるような新しい可能性を生み出すような群としていかに異なるのかを覆い隠すのである。私たちはこのことを、私たち人間のプロセスにおいて観察することができる。人間のプロセスとは例えば、この瞬間の壁の影、光が木の上でどのように戯れているか、お尻の筋肉が今どのように感じられるか、私の今日という日、人生の残りがこれからどのようにインプライされるか、といったことである。

展開することからどのような代替的なモデルが生じるのか、そしてインプリシットなものなぜ、構造のパターンが単独でもっているもの以上の多くの可能性をもつのかについて見ていこう。

### III. インプライングの秩序と正確さ

多くの人々は“ホーリズム”を主張する。そうした人々は、生命体の全体は 1 つであると言う。これは真実である。インプライングのプロセスは生命体全体のものである。しかし、現代の概念では、生命体とは“未規定的な”、可変的な複合体であると考えられている。伝統的なモデルでは“規定されている”とは構造化され、分離されたということを意味している。だから、インプリシットなものは未規定的であるように見える。しかし、インプライングは実際には、特定の規定されているものであり、また規定していくものでもある。なぜならそれは、構造が単独で提供できるよりもはるかに多くのものの帰結であるからだ。私は別のところで、この種の“より規定されている”ものを詳細に論じた。ここではそのことを簡潔に述べよう。

暗黙の可能性は、互いに相互影響している。それぞれの暗黙の可能性が存在している (IS) ということの中には、それが他に影響する仕方と、それが影響することによって影響される仕方を含んでいる。それぞれは、他によって正確化される (precisioned) ので、より正確になっていく。分離できる“それら”が存在する以前に、“それらの”相互作用が最初にある。このより優れた正確さが、それらを構造として未完成にする。それらは互いに、1つの次なる事象と、次なる一連の諸事象をインプライしている。

実際に生起するどんな 1 つの可能性も、他のことが可能になるあり方を変化させる。例えば、私たちがボールを投げたら、それを持って走ったり、それを蹴ることはできない。卵をゆで卵にしたら、それをスクランブルエッグにしたり、ポーチドエッグにすることはできない。その可能性は常に特定の残るが、スクランブルしたりポーチしたりすることは同時には生じない。暗黙の可能性のクラスターは、1 つの次の行為をインプライしてい

る。そしてその行為は、そのクラスターを推進するだろう。

私が行為するどんな 1 つの仕方も、他の可能な行為によってすでに正確化されている。私がある仕方でコーヒーポットを持ち上げるとき、熱い部分に触ることは生じない。そしてコーヒーを注ぐことが可能になるが、私はどのくらいポットを傾けて、多すぎず慌てすぎずに適量を注ぐかをコントロールする。その他の行動は、このコーヒーポットを持ち上げる一連の行為の形成にとって助けとなっている。多くの他の可能な行為は、私が実際にやっていることの形成に常に関与しているのである。どんな行為も実際に、相互影響している行為の可能性の全体的なクラスターを推進する。多くの暗黙の可能性は、次に生じることを形成する。

例えば、どんな次のチェスの一手も、相手の見込みのある可能性のすべてを不可能にしないではいけなく、同時にこちらにとって新たに可能な次の手を開くような手ではなくてはならない。もちろん、チェスはそのルールによって制限されている。しかしそれは、どのように 1 つの動きがまさに正確な可能性の全体的なクラスターを推進するのか、ということのよい実例である。その可能性は混ざり合ってしまったものでも、未規定なものでもない。正確な可能性がなければ、チェスを打つことはできない。その可能性は、“分離した”ということのこのさらに複雑な意味において、特定のかつ分離したものであり続ける。チェスの打ち手は時間が許す限り、多くの可能性をたどることによって動きを検証する。しかしその新しい動きは、すべてが一度にインプライされている可能性のクラスターの暗黙の複雑さから直接心に浮かんでくるのである (Gendlin, *Implicit Precision*(2011)を参照)。

それまでに生じた多くの諸事象は保持されるが、それはさらに複雑なあり方で保持される。今それらは、過去にそうであったようにということと、これからの 1 つのさらなるインプライングにおいての両方で機能している (Gendlin, 1997a の VI 章の“ピラミッド化”を参照)。暗黙の複雑さは、ただそこにあり、ただ対象である構造によって構成されているのではない。暗黙の複雑さは、能動的なインプライングであり、生成し、再・生成しつつある構造である。

ここで私たちはこの論文の主要なテーマ——プロセスが構造を生成する、生成は構造のみではなされない——にたどり着いた。

私たちは、新しいモデルに従って、何が“存在する”のか、あるいは“ある”のかを変化させることができる。私はここで、以下の 4 つの術語を用いてそのことをシンプルに示す。

1. 暗黙の複雑さ
2. インプライングと次なる諸事象の連続の生起
3. 事物が分離することに先立つ、正確な相互作用 (例えば、身体・環境の相互作用)
4. インプライングは次なる諸事象の連続をインプライするが、さらなるインプライングをもたらす

もちろん、このモデルの詳細はここには書かれないが、私は本論文でそれ以上を語ることはできない。その全体のバージョンである『プロセスモデル』(Gendlin, 1997a)を参照していただきたい。

#### IV. 科学とインプリシットなものとの固有の関係

科学の諸概念は数年毎に変化している。今日、科学が私たちに語ることは、40 年前に言われていたこととは異なっている。そして今から 40 年後、今日言われていることの多くは否定されるだろう。健康のために科学が今日推奨されていることを私たちは大事に思っているが、それもまたすぐに違ったものになるだろうことを私たちは知っている。

カントやヘーゲルの時代では、科学とは力学だった。彼らは、自然は力学的なシステムであると述べた。私が若かった頃は、万物は化学であると語られた。私は自分を化学式として考えるように教えられた。今日では、私たちは自分のことを、ニューロンがなす神経



学的な構造と見做すことになっている。

しばらくすると、私たちや自然はまたほかの何かと見なされるだろう。明らかに私たちは、これらのどれか“である”のではない。そこで私たちが実際にいきいきと見ているのは、自然のインプリシットな性質と、私たち自身のインプリシットな性質である。

私たちはエクスプリケーションの連続であるだけではない。私たちは生成的なインプリングであり、エクスプリケイティングである。事象とは、ある展開（エクスプリケイティング）である。

しかしエクスプリケーションは単なる変化ではない。この変化は発展であるが、それを説明しようとするのは、演繹的な連続を示すことではない。なぜなら、そこには新しい領域が開かれ、常に多くのさらに新しい用語がもたらされることになるからである（Fodor, 1974）。しかし、エクスプリケーションはせいぜい数十年は残ることができるに過ぎず、少しずつしか吸収されない多くの結果を生み出す。しかし身体-環境プロセスにおける広大な変化というのも生じる可能性はある。<sup>3</sup>

私たちはここからどのように考えればよいのだろうか？ 私たちの諸概念は、構造のみというよりも構造を生み出す諸プロセスについてのものでありうる。

私たちはまた、私たちが思考しているまさにそのプロセスにおいてインプリシットなものを用いることもできる。私たちが論理とインプリシットなもの両方によって思考することができる時、それはよりシステマティックなものになる。この種の思考が成り立つためには、論理とインプリシットなものが互いにどのように関係しているのかについての新たな理解を必要とする。

通常の思考は事実、その両方の中ですでになされている。思考と言葉（と行為）は、エクスプリシットな知と、インプリシットな体験過程から私たちにやってくるのだ。

明晰さはどんなものでもその両方を含んでいる。 私たちに示される論理的な提示によって生まれる“アハ！”体験は、私たちの体験される理解へのその効果である。明晰さとは（おわかりでしょうが）常に、エクスプリケーションによってもたらされる新鮮なインプリシットな効果である。 明晰さは、構造と感じられる理解の両方である。

私たちがその両方を用いることができる時には、その両方によってシステマティックに思考することが可能になる。私たちは、論理だけが導くところを探求することができる。私たちはまた立ち止まってインプリシットな複雑さに直接に照合することもできる。 そのインプリシットな複雑さ（“あの全体”）は、どんな状況においても、どんな言葉や概念からでも再び新鮮に生じ得る。そのようにすれば私たちは、それがインプライするものを知ることができ、そしてそれがどちらへ導びいていくかを知ることができる。注 5

これらはさらに進んでいくためのとても異なる 2 つの道である。まず私たちは、論理とインプリシットなものいずれもが、互いに不可侵であるように、互いを停止させたり妨害したりしないようにしながら、可能なかぎりそれらが前進するようにすることができる。

それから、私たちは、どのように一方が他方を拡張するかを理解することができる。

論理を用いて、私たちは固定的な述語からその含意を探求する。論理だけでも、他のもので到達できないところまで達することができる。コンピュータは、他の方法では到達できない新たな帰結や新たな領域を私たちにもたらし得る。しかし、そこから（どんなところからでも）新鮮なインプリシットなものが生じ、さらに進んでいく道が拓かれるが、それはコンピュータや論理だけで到達できるところを超えたものである。論理的な推定とインプリシットなもの間には互恵的な関係がある。 一方が停止するときも、他方は進み続けることができる。私たちがまず、それらが代わる代わる作用するままにするなら、一方がなしたことを他方が拡張する。

なぜそれらが互いに継続することができるのかには固有の理由がある。論理的なユニットとは、エクスプリケーションである。論理的なユニットは、推進されつつある身体

- 環境の相互作用である。その有機体的な推進から、新しいユニットが生み出され得る。したがって、そのいずれもが本来的に、他方の暗黙の推進なのである。

私たちが自分たちは、ここからあそこ (there-from-here) という空間における力学的、化学的、あるいは神経学的な構造である、という思考に陥るとき、自分たちを対象とみなしてしまう。観察者の経験として私たちが存在する。Nagel (1986) は次のような謎を投げかけている。“私は自分の脳である”、と彼は言う。しかしそのように言うことで、私はある対象になってしまう。しかもそれは私やあなたの対象ではなく、どこでもないところから見る対象である。彼は現代の科学を、“どこでもないところからの見解 (the view from nowhere)” と呼ぶ。Nagel の謎は、私たちが単なる対象ではあり得ないことを正しく理解させるものである。

現在も存在し続けているこの謎は、次のような仮定から生じている。すなわち、“存在する”ものは、空間を満たしているものからだけ構成される、という仮定である。このような仮定が、なぜ人間とそれ以外のあらゆるものが単に対象であるように思われるかの理由である。

私たちの解答は、事物がいかに“ある”かについての新しい理解である。それはただ対象であるのみならず、その構造を生み出しつつある事物のプロセスである、という理解である。どんなものも単なる対象ではない。ただ対象でのみであるものは存在しない。対象とは、事象の連続をインプライする暗黙の複雑さである。その連続の中では、どんな新たな事象も新鮮なインプライングをもたらすのである。

従来の古いモデルをいまだに仮定している概念によって、新しいモデルを理解するという無駄な努力をしないようにしよう。インプリシット・エクスプリケイティングのプロセスを様々な構造の宇宙に押し込むという不可能な課題に取り組む代わりに、もっと複雑なプロセスからスタートし、その構造をさらに広大なインプライング・エクスプリケイティングのプロセスの中で理解しよう。

## REFERENCES

- The Focusing Institute. *Thinking at the edge*. [http://www.focusing.org/tae\\_steps.html](http://www.focusing.org/tae_steps.html)
- Fodor, J. (1974). Special sciences and the disunity of science as a working hypothesis. *Synthese*, 28, 77-115.
- Gallagher, S. (2005) *How the body shapes the mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Gendlin, E. T. (1997a). *A process model*. New York: The Focusing Institute. A slightly corrected version is available at <http://www.focusing.org/process.html>.
- Gendlin, E.T. (1997b). The responsive order: A new empiricism. *Man and World*, 30 (3), 383-411. Also available at <http://www.focusing.org/gendlin4.html>.
- Gendlin, E.T. (2009). What first and third person processes really are. *Journal of Consciousness Studies*. 16, No. 10
- Gendlin, E.T. (in press). Implicit precision. In Z. Radman (Ed.) *Knowing without thinking: Mind, action, cognition and the phenomenon of the background*. Basingstoke: Palgrave Macmillan (forthcoming). Also available at: [http://www.focusing.org/gendlin/pdf/gendlin\\_implicit\\_precision.pdf](http://www.focusing.org/gendlin/pdf/gendlin_implicit_precision.pdf)
- Nagel, T. (1986). *The view from nowhere*. Oxford: Oxford University Press.
- Stuart, S. A. J. (in press). Enkinaesthesia: the essential sensuous background for co-agency.
- In Z. Radman (Ed.) *Knowing without thinking: Mind, action, cognition and the phenomenon of the background*. Basingstoke: Palgrave Macmillan (forthcoming).

注

1. 意識（感覚）は動物的行動によって生じる。意識は複数の知覚が単に集まったものではない。知覚はそれが生じるごとに生成されており（そしてさらにより複雑なたぐいの時間を生成する）、連続的な時間の中に単純に位置づけられるわけではない（Gendlin 1997a, Chapter IVB）。動的なパターンを用いる人間の認知的能力は、動物的行動とは区別され（かつ、そこから生じ）なければならない（Gendlin 1997a の第六章と第七章 A を参照せよ）。言語と象徴化することは恣意的なものでも慣例的なものではまったくなく、知覚と認知の発達に先立つ有機体的身体—環境の相互作用からはあたかも生成されていないかのようである。

2. 科学が何かを発見していないということ自体が、あたかも科学的発見であるかのようには誤解されることがある。しかし、もしよく知られている事実さえ記録できない道具を使っていれば、その事実気づくことができなくてもあたり前のことである（「帰無仮説を証明することはできない」）

3. 例えば、水分子はすでに完全に定義されたように思われる。しかし近年になって結晶化には複数の方法があることなど、水にはその他にも様々な性質があることが明らかになった。多くの要因が水にこれまで知られていなかった様々な影響を与える。水は生物の重要な構成要素であるため、このこともまた医学に新たな分野を拓くことになるであろう。他の物質でも多くの新しい効果が見出されている。“物質科学”と呼ばれるものが、多くの物質の新たな重要領域を扱っており、工学的利用に重要な成果をもたらしている。インプリシットな複雑さというのは、さらにもういくつかの変数によってのみ構成されているのではない。それは既知の要素や関連性を変える大きな領域を拓きうる。これは発話においても同じである。ある人が言おうとする標準的な意味を超えて、反射的傾聴は非常に異なる意味や関連性を備えたインプリシットな複雑さを明らかにする。

4. ギャラガー（2005）が五つの感覚様式を接続する”通感覚”という概念を提案したのは、それらを結合し発展させる神経学的構造よりもずっと前であった（Gendlin, 2009 の説明を参照せよ）。

スチュアート（印刷中）は“運動感覚化”を環境反応を用いて行う積極的探索の身体的プロセスと定義した。数学、計算、量子コンピューティング、ナノサイエンスの領域でも多くの最近の成果があるが、それらはこうした方向性を示しており、また新たなモデルを必要としている。

5. 概念組織化のための 14 段階の詳細な方法を開発した。TAE（辺縁で考える）は、[http://www.focusing.org/tae\\_steps.html](http://www.focusing.org/tae_steps.html) を参照せよ。